

箱庭制作体験の語りと性格傾向に関する研究

～個人志向性・社会志向性 PN 尺度を用いて～

山 本 沙也加

〔抄 録〕

本研究は、性格傾向による箱庭制作体験の語り方の違いを検討した研究である。箱庭療法では非言語的な側面が大切にされるが、箱庭制作の中で生じたことを言語化していくこともまた重要である。先行研究においては、箱庭と（文章や語りなどを含む）言語化について取り扱われているが、各制作者の箱庭制作体験自体の語られ方の違いについては検討されていない。そこで本研究では、調査協力者に性格傾向を示す個人志向性・社会志向性 PN 尺度に答えてもらい面接可能な協力者に2回のインタビューを行うことにより制作者にとっての箱庭制作体験について検討した。その結果、第1セッションでは、場面の説明としての語り、「途中で何を置こうか迷った・考えた」という語り、「まず～しようと思った」という語りに、第2セッションでは、「覚えていた通り」という語りに有意な、または有意傾向にある偏りが見られ、一部に性格傾向による語り方の違いが示唆された。

キーワード：箱庭，性格，語り，体験

第一章 問 題

箱庭療法は心理療法のひとつである。心理療法には様々な技法があり、どのような側面からどの程度の深さで心を扱うのかという点において異なるが、その種類について河合（1992）は「意識—無意識、という軸」、「言語的—非言語的という軸」、「心—体、という軸」を用いた分類を試みている。まず、意識—無意識についてであるが、「対面での話し合いは、もちろん意識的なかわりが強い」と河合（1992）は述べている。一方、自由連想法や夢分析などは「無意識的なレベルの関与が強くなっていく」（河合，1992）が、それを基に考えると、話し合いに比べて箱庭は、無意識のほうが強くかかわっていると言えるだろう。言語—非言語については、「造形による表現、遊びなどを用いる技法」（河合，1992）が非言語的な技法であるといい、箱庭はこれにあたる。心—体においては、河合（1992）は箱庭について「手で砂に触れるということは身体的な意味をもつだろう」と述べている。これら3つの軸によ

り、箱庭療法は無意識が強くかかわっており、非言語的で、身体的なものと位置づけられる。

箱庭の非言語的な側面の強さについては、河合（1969）が「治療者と患者との関係を重視し、治療者はできるだけ受容的に患者に接し作品が作られている間は無用な介入を避け、作品が作られた後の質問も、できるだけ少なくしている」と述べている。「作品が作られていくときのクライアントの心の動き」（河合、1969）を大切にしているのである。しかし、同時に河合（1969）は「箱庭という一つの媒体を通じて、その表現の中に治療者もクライアントも共に何かを感じ、何かを読み取り、それによって相互関係が深まっていくのであるが、そのようにして得たものを、いかに言語化するかという問題が生じていく」とも述べている。箱庭療法は非言語的であることを特徴としながらも、その中で起こったことをセラピストは言語化していく必要がある。

制作者にとっての箱庭制作と言語化の問題は、いくつかの先行研究において取り扱われている。例えば長谷川（2011）は、箱庭の制作中に浮かんだお話などを制作後に自由記述で求めてインタビューを行い、箱庭制作において生じた物語を制作者はどのように捉え物語を体験しているのかについて考察している。つまり、制作者が自らの物語を対象化しているという「外在」、制作者が物語との一体感を持つが箱庭の世界には存在しないという「箱庭外・内在」、制作者は箱庭の世界に存在しているという「箱庭内・内在」、制作者はアイテムと同化し箱庭の世界に存在しているという「アイテム同化」、制作者は物語を自らの内にもっているという「内包」の5つの箱庭制作者と物語の関わりについての概念を見出している。また、それら5つの概念を3つにカテゴリー化しており、制作者が自らの物語を対象化しているという「外在」、箱庭の世界に自分が存在するかどうかは個人によって異なるが物語に自分が含まれているという「内在」、制作者は物語を自らの内にもっているという「内包」を見出している。また、千葉（2013）は、制作した箱庭について語る前後にSD法評定を求めた後、置き直しを認め、インタビューを行っている。その結果、置き直しをした場合の前後における体験の内容について、イメージは変わらないという「無変化型」、制作した箱庭を言語化することでイメージを深く味わったという「鮮明化型」、箱庭制作後に言語化をすることでまとまりが生じイメージの広がりを感じたという「ストーリー化型」、制作した箱庭の言語化により客観化が進み、制作直後のイメージが薄れたという「客観化型」の4つの箱庭制作体験型に分類している。つまり、千葉（2013）は体験型の分類を試み、箱庭を言葉にしている際の体験はどのようなものであるかという視点を持って、箱庭制作の体験がどのように変化するかについて述べている。

これらにより、箱庭制作体験の言語化の仕方は個人の特徴によって異なるということが示されている。たとえ客観的に見て同じに見える箱庭制作体験であっても、前述の通り、千葉（2013）や長谷川（2011）はその体験の言語化すなわち語り方によっていくつかの類型に分けられることを示している。このタイプの違いは何から生じているのだろうか。それは制作者の性格傾向であり、その性格傾向が箱庭制作体験の語りに影響を及ぼしているのではないだろ

うか。よって、制作者の性格傾向と箱庭制作体験についての語り方において、一定の傾向が認められることが考えられる。さらに、制作後に語ったことが時間を経てどのような語り方に変化するのかということも、制作者の性格傾向が寄与するところが大きいとも考えられる。しかし、そのような観点からの箱庭制作体験の語り方についての研究は見当たらない。そこで本研究では、箱庭制作者の性格傾向が箱庭制作体験の語り方に反映すると仮定し検討を行うことにした。本論では性格傾向を測るものとして、伊藤（1993；1995）の個人志向性・社会志向性 PN 尺度を用いた。これは「健康な発達過程だけでなく精神病理の構造についてもより幅の広い考察が可能」（伊藤，1995）であり、臨床場面により適用できると考えられたため、この尺度を使用することにした。この PN とは、P が positive、N が negative の略である。これは、「成熟した特性を有する肯定的（適応的）状態と、未熟で未発達な否定的（不適応的）状態という表裏 2 面性が想定され」（伊藤，1995）たものであり、「2 志向性の positive / negative 両面」（伊藤，1995）の性格傾向を示すことができる。これを用いて、性格傾向が箱庭制作における語りにもどのような影響を与えるのかについて探索的に検討することを目的とした。

第二章 目 的

第一に、箱庭制作体験として語られる内容は、制作者の性格傾向によってどのように異なるか検討することである。第二に、箱庭制作体験として語った体験が、一週間後に性格傾向によってどのように異なるか検討することである。

第三章 方 法

第一節 調査協力者

質問紙調査への回答者は計 62 名（男性 28 名、女性 34 名）であり、その中の計 21 名（男性 10 名、女性 11 名）に面接調査を実施した。面接調査者の平均年齢は 19.76 歳（ $SD = 0.89$ ）であった。

第二節 調査者

面接者及び見守り手はすべて筆者が行った。

第三節 調査時期

2014 年 10 月初旬から 11 月初旬にかけて実施した。

第四節 手続き

本調査は以下の2段階に分けて実施した。

第一調査

(1) 質問紙の配布と回収

佛教大学の授業内において授業担当者の承諾を得た後、質問紙を配布した。この質問紙は、面接調査の協力依頼書と個人志向性・社会志向性 PN 尺度で構成されており、箱庭制作の調査に参加する意思のある人に尺度を答えてもらうというものであった。配布の際には、個人の性格と箱庭の関連を調査するものであり、2回の面接があることを伝えた。また、箱庭制作をしてもらうこと、許可をもらえればその作品の写真撮影およびインタビューの録音をさせてもらうこと、授業の成績とは一切関係ないことを説明した。質問紙への回答の前には、面接調査の協力依頼書を添付し、承諾した場合のみ、希望の日程とメールアドレスを記入してもらって質問紙の回答をしてもらった。

質問紙を回収したところ、回答への不備を除いた計 61 名（男性 28 名、女性 33 名）が尺度への回答をしていた。

(2) 分析

得られた回答から、伊藤（1993；1995）の下位尺度項目をそのまま採用して、個人志向性 P 尺度得点、社会志向性 P 尺度得点、個人志向性 N 尺度得点、社会志向性 N 尺度得点を算出した。また尺度への回答から協力者をグルーピングするため、4つの下位尺度得点を用いてクラスター分析（Ward 法）を行った。

第二調査

面接の承諾と質問紙の回答が得られた 62 名中回答に不備のあった 1 名を除いた 61 名の中から 21 名（男性 10 名、女性 11 名）を選出した。これは、4つのクラスターの中から 5 人を目安としてランダムに選出したものである。面接対象者には計 2 回の面接を以下のように実施した。

(1) 調査実施環境について

佛教大学の面接・検査実習室において実施した。部屋には、机、ソファ、砂箱、玩具が並ぶ棚が配置されていた。面接は筆者と協力者 1 名で、静かな空間で行われた。

(2) 材料

砂箱（メルコム製）と玩具を使用した。砂箱の内寸は W720 × D570 × H70mm であった。また、記録のために IC レコーダー、デジタルカメラを使用した。

(3) 面接内容

第 1 セッションでは箱庭制作とインタビューを行った。第 2 セッションではまず前回の箱庭について作品の写真を見せずにインタビューをし、その後で作品の写真を見せてインタビューを行った。

まず、第 1 セッションでは、「ここにある砂箱と玩具を使って自由に作って下さい」とい

う教示のもと制作を開始した。目安時間は20分であることを伝え、制作者の合図で制作を終了とした。その後、制作した箱庭作品を見ながらインタビューをした。インタビューの質問内容は表1に示した。インタビューは半構造化面接であり質問項目に沿ったものではあるが、調査協力者の自然な語りを妨げないことに留意した。なお、同意を得て作品の写真撮影とインタビューの録音をした。

次に、第2セッションは、第1セッションの一週間後に行った。まず、第1セッションでの箱庭制作でどのようなことを考えていたかを質問し、思い出しながら語ってもらった。その後、前回の作品の写真を渡し、それを見ながら質問し、語ってもらった。また、第1セッションから第2セッションまでの一週間でのどのような出来事があったのか、箱庭制作がどのような体験であったかを質問した。なお、同意を得てインタビューの録音をした。

(4) 分析

KJ法を参考に、語られた内容をカテゴリー化した。1回目のインタビューと2回目のインタビューそれぞれに逐語録をつくり、語りを意味のあるまとまりごとに切片化した。まず、1回目のインタビューについて、調査協力者全員の切片が何についての語りとなっているかをコーディングしていった。次に、2回目のインタビューについても、1回目と同様にコーディングした。カテゴリー化するには恣意的にならないようにするため、臨床経験があり質的研究の経験がある指導者の指導を受けて分類した。また、第一調査で行ったクラスター分析の結果得られた4つのクラスターのそれぞれに属する調査協力者のうち何名で各カテゴリーの語りが出現したかについて、カテゴリー単位で集計した。カテゴリーの語りの出現の有無にクラスター間で偏りがあるかどうかを検討するため、直接確率検定を行った。

表1 各セッションでの質問内容

質問内容	
第1セッション	・この箱庭を制作している間、どのようなことを考えていましたか。
第2セッション	・前回と同じことを聞きますが、箱庭を制作している間、どのようなことを考えていましたか。 ・(本人の箱庭作品の写真を見せて)改めて見ると、どのような感じがしますか。 ・前回の面接から今日までの1週間で何か変わった出来事がありましたか。 ・箱庭制作体験はどのようなものでしたか。 ・箱庭制作後、質問されるのはどうでしたか。

第四章 結 果

第一調査

まず、個人志向性・社会志向性 PN 尺度の4つの下位尺度である個人志向性 P 尺度、社会志向性 P 尺度、個人志向性 N 尺度、社会志向性 N 尺度についての平均値、標準偏差を表2に示した。また、伊藤(1995)の個人志向性・社会志向性 PN 尺度の平均値と標準偏差を表

3に示した。これと本調査のデータを比較したところほぼ同様の傾向が示され、尺度の信頼性の高さがうかがえた。

次に、調査協力者をグルーピングするため、4つの下位尺度得点を用いたクラスター分析（Ward法）を行った。析出されたデンドログラムをもとに、調査協力者を4つのクラスターに分けるのが妥当であると判断した。調査協力者のうちクラスター1は13名、クラスター2は15名、クラスター3は15名、クラスター4は18名であった。4つのクラスターにおける4つの下位尺度得点をz得点に変換して示したのが図1である。なお、図1にあるPiは個人志向性P尺度、Psは社会志向性P尺度、Niは個人志向性N尺度、Nsは社会志向性N尺度を示している。クラスター1は、個人志向性P尺度と個人志向性N尺度が高く、社会志向性P尺度がやや高い群であり、両価的個人志向群と命名した。クラスター2は、個人志向性P尺度と社会志向性P尺度が高い群であり、ポジティブ群と命名した。クラスター3は、個人志向性N尺度と社会志向性N尺度が高い群であり、ネガティブ群と命名した。クラスター4は、社会志向性P尺度と社会志向性N尺度が高い群であり、両価的社会志向群と命名した。そして各クラスターにおける調査協力者が語る基である制作した箱庭を、代表例として写真1～4に示した。

表2 志向性とPNの4群の平均値と標準偏差

各尺度の名称	男性 (N=28)	女性 (N=33)
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)
個人志向性P尺度	3.45 (.67)	3.36 (.72)
社会志向性P尺度	3.78 (.47)	3.87 (.41)
個人志向性N尺度	2.46 (.62)	2.60 (.56)
社会志向性N尺度	3.50 (.72)	3.51 (.46)

表3 伊藤（1995）の志向性とPNの4群の平均値と標準偏差

各尺度の名称	男性 (N=148)	女性 (N=258)
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)
個人志向性P尺度	3.39 (.70)	3.31 (.67)
社会志向性P尺度	3.82 (.60)	3.84 (.57)
個人志向性N尺度	3.04 (.74)	2.97 (.68)
社会志向性N尺度	3.11 (.65)	3.15 (.69)

〔注〕伊藤（1995）の表を基に筆者がまとめたものである

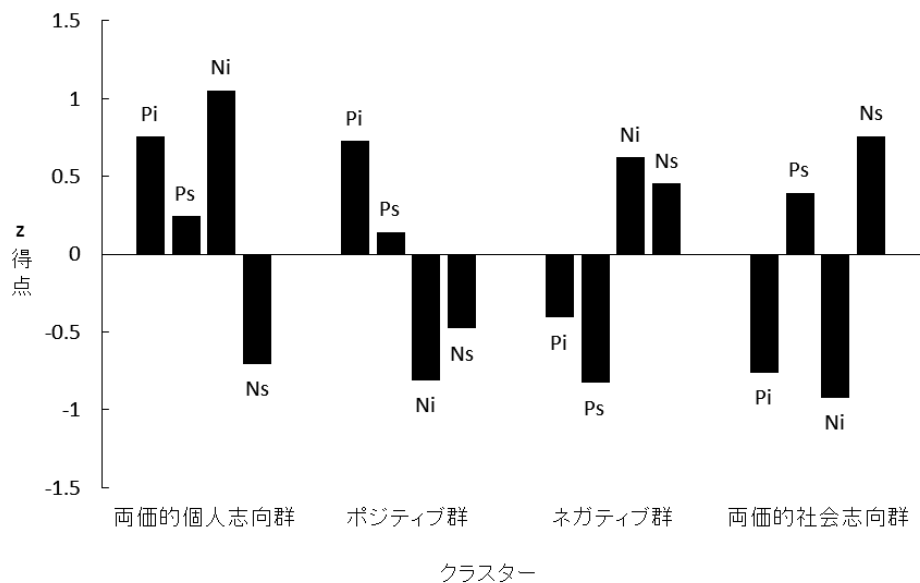


図1 クラスターごとの志向性・PNの平均値(z得点)



写真1 Aさん:両価的個人志向群,男性20歳



写真2 Bさん：ポジティブ群，男性21歳



写真3 Cさん：ネガティブ群，女性20歳



写真4 Dさん：両価的社会志向群，女性19歳

第二調査

第二調査では両価的個人志向群は13名中5名、ポジティブ群は15名中4名、ネガティブ群は15名中5名、両価的社會志向群は18名中7名を対象に面接を行った。協力者1人に対して1週間に1回で計2回の面接を行いその中で得られた語りについてKJ法を参考にカテゴリー化した。カテゴリー化を行った結果、第1セッションでは39種類の小カテゴリーに分類され、第2セッションでは34種類の小カテゴリーに分類された。それぞれ表4と表5に語りの小カテゴリーとその具体例を示した。なお、表4および表5の数値は、小カテゴリーに分類された内容の語りが1回でも出現していれば有りとし、1回も出現していなければ無しとして集計した各群における人数である。また、表6には小カテゴリーの内容から同類と考えられるものを中カテゴリーとしてまとめた。第1セッションでは、自然に心が動いたという語り、意識的に作ったという語り、引き出された感情についての語り、妥協したという語り、アイテムについての語り、全体を見て考えた語り、今ある箱庭とは別の視点に移った語りが、中カテゴリーとしてカテゴリー化された。第2セッションでは、作った時についての語り、引き出された感情についての語り、変化があったという語り、思い出したことについての語り、全体を通して思ったことの語り、箱庭と自分の結びつきについての語りが、中カテゴリーとしてカテゴリー化された。

次に、小カテゴリーの語りの出現の有無にクラスター間で偏りがあるかどうかを検討するため、直接確率検定を行った。第1セッションでは、3種類の語りのカテゴリーにおいて有意な偏りが見られた。1つめは、制作した箱庭の世界をある場面として語った、カテゴリーNo.3場面の説明としての語り（中カテゴリー：全体を見て考えた語り）であった（両側検定：

$p=.03853$ ）。次に Benjamini & Hochberg 法による多重比較を行った結果、ネガティブ群に比べ両価的社会志向群が多い有意差が見られた（ $p=.0455$ ）。2つめは、制作している際の迷いを語った、No.21「途中で何を置こうか迷った・考えた」という語り（中カテゴリー：意識的に作ったという語り）であった（両側検定： $p=.01905$ ）。次に Benjamini & Hochberg 法による多重比較を行った結果、両価的個人志向群に比べ両価的社会志向群が多い有意傾向が見られ、ネガティブ群に比べ両価的社会志向群が多い有意傾向が見られた（共に $p=.0808$ ）。3つめは、箱庭制作を始めた際に語った、No.36「まず～しようと思った」という語り（中カテゴリー：意識的に作ったという語り）であった（両側検定： $p=.0132$ ）。次に Benjamini & Hochberg 法による多重比較を行った結果、両価的個人志向群に比べポジティブ群が多く、ネガティブ群に比べポジティブ群が多い有意差が見られた（共に $p=.0476$ ）。第2セッションでは記憶と写真が一致していることを語った、No.19「覚えていた通り」という語り（中カテゴリー：思い出したことについての語り）に有意な偏りが見られた（両側検定： $p=.0009337$ ）。次に Benjamini & Hochberg 法による多重比較を行った結果、両価的個人志向群に比べポジティブ群が多く（ $p=.0079$ ）、ネガティブ群に比べポジティブ群が多く（ $p=.0079$ ）、両価的社会志向群に比べポジティブ群が多い（ $p=.0152$ ）有意差が見られた。

表 4 第 1 セッションで得られた語り・具体例および出現度数

カテゴリー	両価的 個人志 向群 (人)	ポジティ ブ群 (人)	ネガティ ブ群 (人)	両価的 社会志 向群 (人)	例	有意差
No.1「考えずに～した」という語り	2	3	2	3	あんまり深くどうしようとか、考えていないです	n.s.
No.2感じ・イメージにそって意図的に行ったこと であったという語り	4	4	4	6	電車で外へ向かっていくイメージで、置いて いきました	n.s.
No.3場面の説明としての語り	3	4	2	7	一人で住んでいるっていうのもさみしいん で、座って誰かを待っている	p = .03853
No.4「すでにあるものに合うように」という語り	1	2	0	3	自然でできているのに対して、自然に馴染め る人を置いとこうかな	n.s.
No.5「意図せずそうなった」という語り	1	0	1	2	なんか、気づいたらこうになりました	n.s.
No.6「連想的に～した」という語り	1	1	1	3	緑って言ったら森かなあ	n.s.
No.7「目についた」という語り	1	2	1	1	一番最初に目についた	n.s.
No.8色についての語り	1	0	0	2	結構選ぶ時って色が気になる感じがして	n.s.
No.9フィギュアから受けた印象の語り	2	1	0	5	バツと見ていた時に、この、なんか棚の中 では一番かわいいなあ	n.s.
No.10フィギュアの出来・素材についての語り	0	0	0	2	アヒルもつるつるしているんですけど、この方 のアヒルはやけにリアルだな・・・と	n.s.
No.11「殺風景だった」という語り	0	1	0	2	水の中が殺風景だった	n.s.
No.12「自分が箱の中にいる」という語り	0	2	2	0	自分が森の中にいるって感じで考えて	n.s.
No.13「理想を作った」という語り	2	1	0	2	いずれは、共に笑って過ごせたら・・・いい なあっていうのが	n.s.
No.14「最初は～なかった」という語り	0	1	0	4	最初はイメージとか、全然なかった	n.s.
No.15「好き」という語り	1	3	2	3	自然に触れている方が好き	n.s.
No.16さみしさの語り	2	0	0	2	動物だけだったらさみしかった	n.s.
No.17置いたもの(やったこと)に違和感があるとい う語り	2	0	1	0	どう直したら良いのか分からない・・・でも、 なんか違うなあと思います	n.s.
No.18違和感があつたので置かなかったという 語り	2	3	3	4	最初トリも置いた方がいかなと思ったんで すけど、若干合わなくて、で、戻しました	n.s.
No.19「置いたら落ち着いた」という語り	0	0	0	1	これを置いたときに、ちょっと落ち着いたんで すかね	n.s.
No.20「最初に何を置こうか迷った・考えた」とい う語り	2	2	3	3	どれにしようかなあって考えて、で、色々考え て選んでいました	n.s.
No.21「途中で何を置こうか迷った・考えた」とい う語り	0	0	0	4	その木を置いて、右下で埋め尽くした後 に左上とかあとのところどうしようかなあって なつて	p = .01905
No.22「こうしたいと思った」という語り	2	1	2	4	一休みしている感じが欲しかった	n.s.
No.23フィギュアに自律性・主体性があるかのよ うな語り	2	0	2	1	火が消えるまでに起きたら無事ですかね	n.s.
No.24使いたくなかったという語り	1	3	2	1	人は置きたくなくて	n.s.
No.25「～だったのかな」という語り	0	0	0	1	真ん中がぁいていることに自分が不安だっ たのかなあ	n.s.
No.26「途中で後悔した」という語り	0	1	0	1	最初に海を広くしすぎたなと思って	n.s.
No.27「(もつと)～したかったがでなかったとい う語り	2	1	2	4	本当は、子供とか親子三代にしたいなあと思 っていた	n.s.
No.28「～したかったが○○だったので・・・した 」という語り	0	0	2	3	川作りたかったんですけど、構造が据めなく て、この配置にしたら。じゃあ、池にしようと思 って池にして	n.s.
No.29「撮影を意識した」という語り	0	0	0	1	撮影するんだつたらちよつと外出しといたほう がよいかなあと思って。顔出して	n.s.
No.30語っている内容についての語り	1	0	0	0	あれ？こんなんで良いんですか？	n.s.
No.31「満足した」という語り	1	1	3	2	なかなか満足です	n.s.
No.32「改めて見ると・・・(評価が変わる)とい う語り	0	0	1	0	ごちゃごちゃしてるかな一つ	n.s.
No.33「スペースがあつたので置いた」という語り	0	0	0	2	スペース空いてたんで、並べようと思って	n.s.
No.34「さらに手を加えるなら～」という語り	1	0	2	0	もう一回もし置くとしたら小島全部にするか なあっていうくらい	n.s.
No.35「次々に制作が進んだ」という語り	1	1	1	1	あつ、これで一応、川でも作ろうかな一つ 思つたんです	n.s.
No.36「まず～しようと思った」という語り	0	3	0	1	まずは風景作ろうと思って	p = .0132
No.37砂の難しさについての語り	1	1	0	0	さらさらとしていい手触りだなあと思ったのと、 ここまでさらさらだとういうの(川)作りにくい なあ。こう、作りにくい・・・掘りにくいなと両 方です	n.s.
No.38協力者の現実世界の語り	0	1	1	1	おばあちゃんとかがそうやってちよつと、自分 の庭で、小っちゃく畑を作っていたりするんで	n.s.
No.39以前の箱庭体験の振り返りの語り	1	1	0	1	ここまで動物をいっぱい置いたのは初めて	n.s.

表5 第2セッションで得られた語り・具体例および出現度数

カテゴリー	両偏的 個人志 向群 (人)	ポジティ ブ群 (人)	ネガティ ブ群 (人)	両偏的 社会志 向群 (人)	例	有意差
No.1「迷った・悩んだ」という語り	1	0	2	3	最初は何を作っていいのかわからなくて	n.s.
No.2納得しきれない語り	1	1	3	0	仕方なしに置いた感じ	n.s.
No.3自分が何を考えていたかわからないという語り	0	0	4	1	自分でもこう、どう思っていたのかわからないのがあって	n.s.
No.4さみしさの語り	3	1	2	2	家が1つだとさみしい気がしました	n.s.
No.5箱庭を作るのが難しかったという語り	0	0	1	0	案外難しいなあと思ったのが一番ですわね	n.s.
No.6言葉にするのが難しかったという語り	2	1	1	2	説明難しいなあとは思ってましたね	n.s.
No.7できるかなと不安だったという語り	1	1	0	1	作れるのかなあと思っていた	n.s.
No.8「うまく答えられているか心配だった」という語り	1	0	0	0	うまく答えられているか心配になったり。むしろ、そっちですかね	n.s.
No.9「たぶん～を使っていて、それは・・・な感じでした」という語り	0	0	0	2	たぶん一番おっきい木を置いたのかな、わあ、すごい緑！みたいな感じでした	n.s.
No.10「～したことには意図があった」という語り	3	2	1	4	街の真ん中を意識して作った	n.s.
No.11場面の説明としての語り	1	1	0	2	はっこの方でたじろいでいるっていうイメージです	n.s.
No.12「すでにあるものに合うようにした」という語り	1	1	2	3	緑置いているからこそ木が置ける、合ってるなあみたいな感じで	n.s.
No.13「好き」という語り	0	0	1	2	色っていうかパッと目についたもの、割と好きな色の方が多いと思う	n.s.
No.14「こうしたいと思った」という語り	4	1	2	4	色んな家があらいたらいなあと思って色んな種類の家を置きました	n.s.
No.15フィギュアから受けた印象の語り	0	0	0	2	ほほえましい感じだったんで、その2人しました	n.s.
No.16「しっくりきている」という語り	1	0	0	2	置いたらしっくりきたので置いて	n.s.
No.17「語れて・聴いてもらえてよかった」という語り	2	0	1	0	自分が考えたことを表現する機会が全然ないので、それが良かったと思います	n.s.
No.18覚えていなかったという語り	2	0	1	4	このへんちょっと忘れていました	n.s.
No.19「覚えていた通り」という語り	0	4	0	1	覚えている範囲がちよっと狭まっているので、完全に一致かわからないですけど、でも、一緒だと思います	p = .0009337
No.20「覚えていたのと違う・忘れていた」という語り	1	1	0	2	思ったより奥の方が隠れているな	n.s.
No.21写真を見てポジティブな印象をもった語り	1	0	2	1	懐かしいですね、こうやって見ると	n.s.
No.22写真を見ると作ったときは感じ方が異なるという語り	0	1	1	3	作ったときは置くものひとつひとつにこのために、癒しの動物とか、決めて置いたんですけど、今見たら細かい	n.s.
No.23「(できなかったが)こうしたかった」という語り	1	2	2	1	木の本数増やしたりとか、花とかも置きたかったなあ	n.s.
No.24箱庭と自分を関連づけようとする語り	3	3	2	5	仲間でワイワイしている方が好きなので、全体的に複数の動物が多いのかなあ	n.s.
No.25「考えずに～した」という語り	4	3	4	5	ほぼ最後のほうに置いて、別に何も気に留めてなくて	n.s.
No.26「満足した」という語り	1	2	2	2	もう、満足です。ただただ満足です	n.s.
No.27「がっかりした」という語り	0	0	1	0	初めて置いてつまらないのができたな、と。そこがちょっと自分のがっかりというか	n.s.
No.28「箱庭が現実生活に影響を与えた」という語り	0	0	1	0	それがすごいびっくりと、ショックと・・・エネルギーがどっか行っちゃった感じで	n.s.
No.29「次の箱庭を置くとしたら」という語り	1	1	2	0	もうちょっと物を少なくして、もっと色々作ってみたいなとは思っていますね	n.s.
No.30作り始めについての語り	1	1	3	2	探り探り、まあ、とりあえず木を置いて、基盤を作て・・・ってやりました	n.s.
No.31「徐々に作りたいもの・イメージができていった」という語り	2	0	0	2	最初からじゃなくて、その作っているうちに思いついて置いていった感じが強いです	n.s.
No.32「スペースが気になった」という語り	0	0	2	1	ここぽっかり空いていたからなんか置こうと思って	n.s.
No.33以前の箱庭体験の振り返りの語り	0	1	1	0	これをなんかよく使っているなあ。印象があります。隅っこにガチャっとはめて、そこから川を作るみたいな	n.s.
No.34自分の世界を作る魅力の語り	1	1	1	2	自分で作れるっていう自由さが楽しいかな	n.s.

表 6 中カテゴリーと小カテゴリーの一覧

セッション	中カテゴリー名	小カテゴリー名
1	自然に心が動いたという語り	No.1「考えずに～した」という語り、No.5「意図せずそうなった」という語り、No.6「連想的に～した」という語り、No.7「目についた」という語り、No.14「最初は～なかった」という語り、No.35「次々に制作が進んだ」という語り
	意識的に作ったという語り	No.2意図的に行ったことであったという語り、No.4「すでにあるものに合うように」という語り、No.12「自分が箱の中にいる」という語り、No.13「理想を作った」という語り、No.18違和感があったので置かなかったという語り、No.20「最初に何を置こうか迷った・考えた」という語り、No.21「途中で何を置こうか迷った・考えた」という語り、No.22「こうしたいと思った」という語り、No.24使いたくなかったという語り、No.36「まず～しようと思った」という語り
	引き出された感情についての語り	No.15「好き」という語り、No.16さみしさの語り、No.19「置いたら落ち着いた」という語り、No.26「途中で後悔した」という語り、No.31「満足した」という語り
	妥協したという語り	No.17置いたもの(やったこと)に違和感があるという語り、No.27(もっと)～したかったができなかったという語り、No.28「～したかったが〇〇だったので・・・した」という語り、No.33「スペースがあったので置いた」という語り
	アイテムについての語り	No.8色についての語り、No.9フィギュアから受けた印象の語り、No.10フィギュアの出来・素材についての語り、No.23フィギュアに自律性・主体性があるかのような語り、No.37砂の難しさについての語り
	全体を見て考えた語り	No.3場面の説明としての語り、No.11「殺風景だった」という語り、No.25「～だったのかな」という語り、No.32「改めて見ると・・・(評価が変わる)」という語り、No.34「さらに手を加えるなら～」という語り
2	今ある箱庭とは別の視点に移った語り	No.29「撮影を意識した」という語り、No.30語っている内容についての語り、No.38協力者の現実世界の語り、No.39以前の箱庭体験の振り返りの語り
	作った時についての語り	No.1「迷った・悩んだ」という語り、No.2納得しきれない語り、No.5箱庭を作るのが難しかったという語り、No.6言葉にするのが難しかったという語り、No.8「うまく答えられているか心配だった」という語り、No.9「たぶん～を使っていて、それは・・・な感じでした」という語り、No.10「～したことに意図があった」という語り、No.11場面の説明としての語り、No.12「すでにあるものに合うようにした」という語り、No.14「こうしたいと思った」という語り、No.15フィギュアから受けた印象の語り、No.23「(できなかったが)こうしたかった」という語り、No.25「考えずに～した」という語り、No.30作り始めについての語り、No.31「徐々に作りたいもの・イメージができていった」という語り、No.32「スペースが気になった」という語り
	引き出された感情についての語り	No.4さみしさの語り、No.7できるかなと不安だったという語り、No.13「好き」という語り、No.16「しっくりきている」という語り、No.17「語れて・聴いてもらえてよかった」という語り、No.26「満足した」という語り、No.27「がっかりした」という語り
	変化があったという語り	No.21写真を見てポジティブな印象をもった語り、No.22写真を見ると作ったときとは感じ方が異なるという語り
	思い出したことについての語り	No.3自分が何を考えていたか分からないという語り、No.18覚えていなかったという語り、No.19「覚えていた通り」という語り、No.20「覚えていたのと違う・忘れていた」という語り、No.33以前の箱庭体験の振り返りの語り
	全体を通して思ったことの語り	No.29「次の箱庭を置くとしたら」という語り、No.34自分の世界を作る魅力の語り
	箱庭と自分の結びつきについての語り	No.24箱庭と自分を関連づけようとする語り、No.28「箱庭が現実生活に影響を与えた」という語り

第五章 考 察

第一節 第一調査

個人志向性・社会志向性のPNについて、伊藤（1995）のデータと本調査のデータを比較すると、多少の差はあるものの傾向としては一致した。どちらも調査対象者が大学生であり、変化や成長の過程には大学生に特有のものがあることがうかがえた。

クラスター分析については、4つのクラスターに分けられた。個人志向性P尺度と個人志向性N尺度が高い両価的個人志向群、個人志向性P尺度と社会志向性P尺度が高いポジティブ群、個人志向性N尺度と社会志向性N尺度が高いネガティブ群、社会志向性P尺度と社会志向性N尺度が高い両価的社会志向群、とそれぞれ偏った特徴がうかがえた。伊藤（1994）によると「青年期は2志向性が不均衡になりやすく、両者が動揺と危機を繰り返しつつ変化成長していく段階にある」という。本調査では、調査協力者である大学生の2志向性は不均衡にあり、前述の伊藤による青年期の特徴を支持するものとなった。

第二節 第二調査

(1) 語りのカテゴリー化

第1セッションでは39種類、第2セッションでは34種類の小カテゴリーに分類される箱庭制作体験の語りが得られた。両者を比較し特徴的なことは、第2セッションにおいて、中カテゴリーに分類したように箱庭制作体験と自分を結び付けている語り（表6参照）が生じたことである。山口（2001）は箱庭制作について「人はこれら無造作に置かれた素材のなかから、物語を語るときにいくつかの出来事を選択するように、いくつかの玩具を選択する」ものであるとしている。箱庭制作体験が自分を語る体験に類似していることから、箱庭と自分の結び付きについての語りが自然に生じたのかもしれない。箱庭制作体験と自分の結び付きについての語りは制作直後ではなされなかったが、一週間を経て箱庭制作体験と自分とを関連付けて語るようになっていく。箱庭制作体験は、性格傾向に関係なく、時間を経て新たな意味を持つようになったといえる。

次に、性格傾向（志向性）による語りの偏りについて述べる。まず、第1セッションでは、No.3場面の説明としての語り、No.21「途中で何を置こうか迷った・考えた」という語り、No.36「まず～しようと思った」という語りに有意な、または有意傾向にある偏りが見られた。No.3場面の説明としての語りは、ネガティブ群に比べて両価的社会志向群に多い。特にこのカテゴリーの語りは、両価的社会志向群において全員に出現しており、両価的社会志向群に認められる一定の傾向といえるだろう。例えば写真4の箱庭を制作したDさん（両価的社会志向群）は「そうですね。・・・なんというか、追い出された動物達が復讐している感じですかね」や「キツネは・・・見ている感じです。この光景を」など述べた。全体的な

箱庭の中にある場面を語ったものである。一方、例えば写真3の箱庭を制作したCさん（ネガティブ群）は「小さ目の家を置きたくて」や「森っぽい感じにしたい」など場面の説明というよりかは自分の気持ちを語ることが多いようであった。これらより、両価的社会志向群には聴き手（筆者）が理解しやすいように語るという社会志向らしい一側面があることが分かる。社会で上手くやっていくために他者への気遣いが多くなるということなのかもしれない。これは伊藤（1995）が社会志向性の negative な状態について「未熟で一方的な依存や、自我の強さに裏づけされない他者への追従、自分を殺してまでの過剰適応」としていることから裏付けられる。また、両価的社会志向群は No.21「途中で何を置こうか迷った・考えた」という語りで有意傾向があった。これは両価的社会志向群においてのみ出現した語りであり、これも両価的社会志向群に認められる一定の傾向である。Dさん（両価的社会志向群）は「置いたあと、どうしようと思って」とも述べていた。これらを合わせて考えると、両価的社会志向群の語りは、説明的だといえるだろう。それは相手からの理解を得て適応しようとする特性によるものではないだろうか。No.36「まず～しようと思った」という語りは、両価的個人志向群およびネガティブ群と比べてポジティブ群に多かった。例えば写真2の箱庭を制作したBさん（ポジティブ群）は、どんなことを感じながら作っていたかを尋ねられると「木いっぱいにして、ジャングルみたいにしようかなーと作り始めて」と述べた。「まず～しようとした」ということから、箱庭制作という課題場面で最初から積極的に自分が関わろうとしたことがうかがえる。一方、写真1の箱庭を制作したAさん（両価的個人志向群）はB（ポジティブ群）さんと同様に尋ねられると「とりあえず最初は町を作ったと思って町作って・・・なんか、川を作った時に反対側をちょっと別の感じにしようかなあと思って」と述べた。また、砂を触ったのは「川か海か、青い所使いたかったんで、どんな感じでできるかなあと思って」と言い、それによってイメージが掴めたかと尋ねると「まあまあは掴めました」と述べた。また、Cさん（ネガティブ群）はBさん（ポジティブ群）やAさん（両価的個人志向群）と同様に尋ねられると「どんなこと・・・そうですね・・・あんまり何も考えずに直感でちょっと置きたいやつを置いていった感じです」と述べた。これらのような「とりあえず」や「まあまあ」など自信なさげな語り方は、Bさん（ポジティブ群）とは明らかに異なっている。このNo.36「まず～しようと思った」という語りは両価的個人志向群とネガティブ群においては皆無であったが、個人志向性N尺度が高いことが両価的個人志向群とネガティブ群の共通点である。伊藤（1995）によると「個人志向性の negative な状態としては、個人への関心が高まった自己愛や個人主義（エゴイズム）」があると言う。つまり、「とりあえず」や「まあまあ」など自信のなさをおそらくはじめ表現することは、傷つきたくないという自己愛の存在によるものと考えられる。つまりNo.36「まず～しようとした」という語り方は、B（ポジティブ群）さんの性格傾向すなわちポジティブ群に認められる一定の傾向と言えるだろう。

次に、第2セッションでは、No.19「覚えていた通り」という語りに有意な偏りが見られた。

これもポジティブ群に多い語りであり、両価的個人志向群とネガティブ群においては皆無であった。例えばBさん（ポジティブ群）は、自分が制作した箱庭の写真を見ずに先週の箱庭について語った後、写真を見せながら「改めて見ると、どのような感じがしますか」と尋ねたときに、「大体はこの通りかなと思ったんですけど」と述べた。先週の作った箱庭とイメージ通りかどうかを尋ねると「大体イメージ通りです」とも述べた。自分のイメージと制作した箱庭がほぼ一致しているようである。一方、例えばAさん（両価的個人志向群）は「うーん、だいたい覚えている通りですね」と答えるが「あ、なんか、ポストあったけー？って思います」と覚えていたものと完全に一致している訳ではないことを述べた。Cさん（ネガティブ群）は「改めて見ると、どのような感じがしますか」と尋ねられると「そうですね…うーん。この辺さみしいかなと思うんですけど」と答え、思い出した通りか尋ねると「そうですね」と述べており、覚えていた通りであったと、すぐには答えなかった。このように、Aさん（両価的個人志向群）もCさん（ネガティブ群）も、Bさん（ポジティブ群）ほどはっきりと、覚えていた通りであるとは述べなかった。Bさん（ポジティブ群）は自分をポジティブに捉えられているからこそ、自信を持って語れたと考えられる。自分の語りが変容していることに疑念をはさまず、事実と自分が語ったことが同様であったと体験している可能性が考えられる。そして、このように自分が正解と一致しているような体験により、ポジティブな感情がさらに高まっていくことも考えられる。

これらを通して、ポジティブ群という性格傾向にある人には、他の性格傾向の群よりも明らかに、語り方に一定の傾向があることが示された。第1セッションNo.36「まず～しようと思った」という語りおよび第2セッションNo.19「覚えていた通り」という語りにおいてポジティブ群に多い語りとなっており、他3つの性格傾向の群に比べて有意差が多く見られている。ポジティブ群は「自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で、自己実現に近い特性を表す」（伊藤，1993）という個人志向性と「社会の中でうまく適応していくための特性を意味する」（伊藤，1993）社会志向性がともに高い状態にある。自己実現と社会適応の両立はしばしば困難であるが、それを成し遂げているという意味では安定している。それと比べて他の性格傾向の群は不安定さを持っていると言えるだろう。ポジティブ群という性格傾向そのものが安定していることによって、語り方に一定の傾向が認められたと考えられる。

しかし、他のカテゴリーの大半の語りには、有意差が出なかった。これは、今回用いた個人志向性・社会志向性PN尺度による性格に関係なく、箱庭制作体験を語ることに於いて共通する語りが多々あるということである。箱庭が心理療法のひとつとして用いることができるということは多くの人々が同じような体験をして個人によって心理的に影響を及ぼすような大きなズレは生じないためと考え、これは当然のことなのかもしれない。一方、少数ではあるが、有意差が出た語り（第1セッションのNo.3場面の説明としての語り、No.36「まず～しようと思った」という語り、第2セッションのNo.19「覚えていた通り」という語り）

および有意傾向にある語り（第1セッションのNo.21「途中で何を置こうか迷った・考えた」という語り）は、個人志向性・社会志向性PN尺度による性格に基づく違いであり、本研究の目的から見て重要な結果である。特に前述の通り、ポジティブ群はNo.36「まず～しようと思った」という語りとNo.19「覚えていた通り」という語りが他の群に比べて多い、特徴のある群であった。この群は体験をポジティブに変容させて語ることでできる力を持つのであろう。

箱庭制作体験においては、どのような性格傾向であっても時間を経ると新たな意味を持つようになる。しかし、その体験を語る際には、性格傾向によって語り方が異なり、語り方に一定の傾向が認められることが示唆された。

(2) 結論と今後の課題

本調査では、性格傾向が箱庭制作における語りにどのような影響を与えるのかについて探索的に検討した。その結果、箱庭制作体験において、時間の経過に伴って自分との結びつきについての語り生まれその体験が新たな意味を持つことには性格傾向に関係はなかった。しかし語り方そのものについては、少数のカテゴリーにおいては、性格傾向によって一定の傾向があることが認められ、本調査上では重要な意味を持つものである。調査は週1回で計2回の面接を行ったが、長期的に面接回数を重ねていけば、性格傾向による一定の傾向がさらに明白となったかもしれない。この点は、今後の課題のひとつであろう。また、クラスター分析を行ったことにより、大学生を対象とした伊藤（1995）の個人志向性・社会志向性PN尺度の平均値と標準偏差と本調査のデータを比較したところほぼ同様の傾向が示され、青年期の両志向性が多くの場合は不均衡であることが示された。これは語り方に影響し、体験の意味づけにも影響を及ぼしている。これを臨床場面にあてはめて考えると次のような結論に達する。つまり、クライアントが訴えている苦悩は、クライアント自身の語り方によって苦しい体験とされており、その語り方はクライアントの性格傾向によるものである。そうであるならば、クライアントとセラピストがその性格傾向に着目し、バランスを保っていかうとすることで、ポジティブな理解と変化が生まれるのではないだろうか。

Arthur Kleinman (1996) は病いについて「^{ネゴシエーション}異なった社会状況における取決め」や「個々の入り組んだ人間関係における取決め」による慣習的な予測および病いの際の振る舞い方についての予測は「各々のユニークな個人史」によるとし、「病の経験はつねに独特なものである」と言うことも可能である」と述べている。個人史には個人の性格傾向が強く関係しており、本調査でいえば、箱庭制作体験も（個人によって）つねに独特なものといえるのである。性格傾向と箱庭制作体験における語り方について検討してきたが、語り手独自の語りによって生み出される体験の意味は、それぞれ異なってくることが示唆された。今後は、クライアントが体験したことの意味づけとその変化において、どのような治療的意味をもつのかという点を検討していきたい。

〔引用文献〕

- Arthur Kleinman (1988) . THE ILLNESS NARRATIVES : Suffering, Healing and the Human Condition.
江口重幸・五木田紳・上野豪志（訳）（1996）. 病の語り—慢性の病をめぐる臨床人類学. 誠信書房.
千葉友里香（2013）. 箱庭を語ることによるイメージ変容の体験 4つの体験と意味. 箱庭療法学研究, 26（1）, 17-30.
長谷川千紘（2011）. 箱庭制作における物語の体験. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 125-137.
伊藤美奈子（1993）. 個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 64（2）, 115-122.
伊藤美奈子（1994）. 性格特性の一面性と個人志向性・社会志向性との関連について. 心理学研究, 65（1）, 18-24.
伊藤美奈子（1995）. 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討. 心理学研究, 13（1）, 39-47.
河合隼雄（1969）. 箱庭療法入門. 誠信書房.
河合隼雄（1992）. 心理療法序説. 岩波書店.
山口素子（2001）. 心理療法における自分の物語の発見について. 河合隼雄（総編）. 心理療法と物語. 岩波書店, pp113-151.

〔付記〕

本論文は平成 26 年度に佛教大学教育学部に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。また、本研究は、佛教大学「人を対象とする研究」倫理審査委員会での審査・承認を得ている（申請番号 H26- 学部 38）。

謝辞

本論をまとめるにあたり、多忙な中、貴重な時間を割いて御指導下さった、石原宏先生に心より感謝いたします。また、調査協力者としてご協力下さった方々、および予備調査の調査協力者としてご協力下さった方にも厚く御礼申し上げます。

（やまもとさやか・教育学研究科臨床心理学専攻修士課程）

（指導教員：石原 宏 准教授）

2015 年 9 月 30 日受理